



2回の空襲を体験しましたが、  
いまだに忘れることはできません。

当時から東成区東中本地区にお住まいの岡倉さんは、  
東中本小学校の屋上から空襲を目の当たりにしました。

おかくら さぶろう  
岡倉三郎さん(当時9才)

### 空襲でまちが火の海に

わたしは空襲を2回体験しています。1回目は昭和20年6月15日でした。当時は「警防団」という組織が各町会にあって、学校の屋上から敵機が来ないか見張っていました。東中本小学校の屋上に近所のおじさんがいたため、わたしはそこへ遊びに行きました。屋上へ遊びに上がったところ、警戒警報が鳴り、警防団の人に「そろそろ下りなさい。」と言われましたが、下りかけてすぐ空襲警報にかわりました。「もう空襲警報が鳴ったから、下りたら危ない。ここにいなさい。」と言われたので、その場で待っていたらすぐに大きな爆撃機が飛んできました。

昭和20年3月ごろから東京や大阪は空襲が始まっており、そのころは夜の暗いうちに焼夷弾を落としていましたが、6月ごろになると白昼堂々とB29が飛んでいました。6月15日もお昼前ごろだったと思います。遠くの

空の向こうからたくさん飛行機が飛んでくるのが見えました。東中本小学校の屋上でしたから、玉造橋から鶴橋のあたり、東成区でいうと中道の周辺が燃えているのが見えました。いくつもの焼夷弾がスーッと落ちていき、黒い塊が花火のようにパッと散るのをくり返し、広範囲に落ちていきました。それから10秒、長くて20秒程で真っ黒の煙が一面に上がりました。さらに30秒過ぎたころには炎に変わっていました。

当時、学校では防火訓練や避難訓練は何度も行われていました。焼夷弾が落ちて来たら「火消し棒」を使って火を消すように訓練をして



「火消し棒と防火用水」  
提供：ピースおおさか

いました。「火消し棒」というのは大きなハタキみたいなもので、物干竿の先に、荒縄を何本か束ねたものです。それを防火用水の水の中につけて火を消すという仕組みです。しかし、焼夷弾が落ちてから煙にかわるまでの早さを目の当たりにして、わたしたちがしている訓練ではとても間に合わないと感じました。



「警防団」 提供：岡倉三郎さん

### 1トン爆弾の衝撃

2回目は終戦前日の昭和20年8月14日でした。大阪砲兵工廠を目標とした大空襲がありました。その日はとても暑い日で、午前と午後の2回に分けて空襲がありました。

第1波の空襲警報が鳴り、妹と2人で畑の真ん中にある防空壕へと逃げ込みました。しばらくして、爆弾の音が響いてきました。1トン爆弾は落ちると地震のようにゆれます。わたしが入っていた防空壕の壁が、縮んだり広がったりするのを感じました。その時は圧死すると思い、怖かったです。暗い防空壕でも、壁が迫る様子をはっきりと見えていました。目で見えるほど強い振動があったということです。

それだけ威力のある1トン爆弾が何百発も落とされたので、わたしの家の周辺は悲惨な状況でした。その影響で、わたしの家の離れに大きなどろの塊が落ちてきて、天井裏の頑丈な梁が真っ二つに折れ、畳が床下までくずれていました。屋根には大穴が空き、家

具は全て爆風で飛び、柱のみが残るといふ惨状でした。森ノ宮付近で大きな炎が上がり、トタンが真っ赤に焼け、紙切れのように飛んでいました。炎の行く手を確認するため、家の2階にある物干し台に上がりました。そこで再び空襲警報が鳴り、母親にもどるよう言われたため、防空壕にもどり



「家の中の防空壕の模型」  
提供：ピースおおさか

第2波は爆弾が近くに落ちたため、さらにゆれました。飛行機が遠ざかるのを待ち、外に出てみると、先程までいた物干し台が爆風で全て吹き飛び、見る影もありません。わたしは防空壕に入ったため助かりましたが、物干し台にいたら確実に死んでいたと思います。これらの空襲体験は、いまだに忘れることができません。

### 狙撃される恐怖

わたしの場合は奈良県の生駒山の方に親せきの家があったため、「縁故疎開」へ行きました。「集団疎開」は学校単位ですのため、あまり自由に行動ができませんが、わたしは「縁故疎開」であったため比較的大阪にも帰ることができました。その時に空襲にあいましたが、なんとか助かりました。

しかし、疎開先でも危険なことはありました。空襲警報が発令されたことに気づかず、もう少しで戦闘機に撃たれるところだったのです。生駒駅の付近を歩いていたら、知らない学校の同じ年ぐらいの子が「君、そんなところにいたら危ない!ここに入りたまえ!」と建物の中へ誘導してくれました。すると、戦闘機が生駒山ぞいにスーッと下りて来て、動くもの